

第4節・Further Information

シュバイツァーのimpressiveな（印象的な）言葉を第3節で、私とシュバイツァーの出会いを第1節で、そしてこのシュバイツァーの思想と行動を形成した経過を簡単ではあるが第2節に記した。

なお、第2節のシュバイツァーに大きな影響を与えた子供の頃の出来事については、詳しくは短大初年度より1994年度までテキストにしていた『My childhood and youth』（*2）を参照のこと。（*2）は短大図書館に何冊かおいている。（『同上書』は1995年以降も補助テキストとして何度か使用。）

この第4節では、以下二点だけを紹介したい。

一つは（“未開、の地にある）原住民問題をどう捉えるかということであり、もう一つはシュバイツァーの理論の中心をなす、REVERENCE FOR LIFE（「生命の畏敬^{いけい}」）についてである。

（*10）掲載写真は著作権の関係で省略。

（1）原住民をどう見るか——シュバイツァーは、何故、原住民に厳しく接したか

野村実氏の著作・『人間シュバイツェル』の中には「無知な黒人」という表現がでてきたり、野村氏は黒人を使って戸外で働くシュバイツァーの態度はまことに厳しかったと言っている。

なお、シュバイツァーはこうも言っている。

「きびしすぎるかもしれない。しかし、これ以外に致し方ない。黒人は私たちの兄弟だが、私たちは大きな兄で、彼らは小さな弟だ」（*9: pp49-50）。

※【解説：ウィキペディアから抜粋】野村 実（のむら みのる、1901年2月16日 - 1996年2月19日）は、日本の医師、シュヴァイツァー研究家。東京生まれ。1925年九州帝国大学医学部卒。1934年東京で結核病院を開業。1951年白十字会村山サナトリウム院長。1954年アフリカにシュヴァイツァーを訪ね、翌年のノーベル賞受賞に随行した。1959年東京コロニー理事長。キリスト教海外医療協力会会長。1970年日本シュヴァイツァー友の会会長。

これらをどう考えるか。

まず、当時の原住民の状態を知らなければならない。

『同上書』の中から当時の状況を紹介する。

彼らは、仕事の道具を与えられると、返すときに悪いのと取り替えたり、仕事の途中で猟に行ったり（*9: pp48-49）した。さらに薬を渡されても「文字を知らず……彼らは二日分の薬を一回に飲んでしまうかもしれない。軟膏^{なんこう}を手渡したのでは、これをなめる危険もさけられない」（*9:p55）。開腹術後でも水浴するかもしれない、と。

"..... grave anxiety about the patients who have undergone operations..... If they feel inclined, they go and bathe in the river the day after the operations....." (*6:p46)

{【浜田訳例】手術を受けた患者達についての深刻な不安……もし、彼らが水浴をしたいと感じたならば、手術を受けた翌日に川へ行き水浴をする……(※注：the day after =翌日、その日ならばon the day afterとなる)}。

しかし、これは文化の違いだから仕方ないのではないかと思った。

だが、次の記述を読んで驚いた。

「二人の男から金を受けとって、……女の子を妻にやると約束した父親があった。……双方の男から約束の履行を迫られ……困った^{あげく}挙句、……娘を殺して、その肉を二人の男に分けて与えた。二人の男はその肉を食うことによって、ようやく納得ができ、話に始末がついたというのである。……事実あった話である」(*9:p100)。

また、「パフィン族の間では、今なお人食いが行われる」(*9:p100)とされている。今とは、私が小学校の頃のことである。(現時点でのことは不明)。

ここまで読んで、いささか憂鬱^{ゆううつ}になった。

しかし、もう少し読むと少しだけ心が和んできた。

「赤痢流行……(彼らは)……患者の排出物で汚れた水を飲んだり……赤痢患者……と一緒に生活を始めた。……(そして彼らは)……『兄弟の面倒をみないよりはいっしょに死にたい』と答えるしまつ」(*10: pp87-88)であった、とある。

これは否定的に書かれているのだが、私にはかすかに光がさす思いであった。そして私の感情を決定的に明るくしたのは、アフリカでシュバイツァーの手助けをしていた医師野村氏の現地の生活について書かれた次の文である。

「らい患者の中に、オザケ・エミールという……黒人がいた。……他の患者に^こ伍して労働に励む。……しかし、彼は午後の労働には出なかった。病院の掟にそむいてである。彼は午後になると……学校を開くのであった。……山で遊びほうけて定刻に集まらない子供たちを、恐ろしい剣幕で叱りつけ……誰が彼を学校の先生に任命し……このような権を与えたのであろう。彼は、子供たちの教育を彼の信仰から、彼の使命と感じているのであろう。……オザケ・エミールは、ある日、白人から呼ばれた。『学校の生徒は何人いるのか』『七人です』『七人は少ない。学校をやめて午後も働きなさい』。従順な彼は、それから午後も働いて、子供たちは、遊び回った。しかし、十日の後に学校はまた始まった。こんどは、先生がひとりではなかった。……らい村の子供たちに幸あれと祈る」(*9: pp89-94)。

野村氏は、彼らの澄んだ目に強い印象を受け「赤道のアフリカの黒人……彼らの将来には明るい希望を持つことができる。素朴、単純、正直な人間こそ、本当の人間として成長する望みがある」(*9: p108)と結んでいる。

これらのことから、原住民をどうみるかを考えたり、シュバイツァーの言動を判断したりしなければならぬ。いずれ、シュバイツァーのみならず、異なる時代、そして異文化と人間についての

見方も検討しなければならぬと考えている。なお、野村氏のこの本の中で、ある老婆の死に臨むシュバイツァーの敬虔な姿が印象に残ったことを付け加えておく。

※実は、シュバイツァーについて、もう一つの課題がある。

それは、本多勝一氏などの「シュバイツァーのいかさま性などは、侵略された者・意味された者の眼には一見して見抜けるのですが、シュバイツァー自身には、これはわからないのです。なにしろ善意にあふれている」(*13:p199)との指摘の問題である。この課題に対しては、一年の授業を通じて自ずと答えが出ると思われるので、ここでは検討しないことにする。

(2) 生命の畏敬 [REVERENCE FOR LIFE]

社会科の教科書や入試などでシュバイツァーについて取り上げられるのは、主として生命への畏敬 (REVERENCE FOR LIFE) の概念であることが多い。

確かに、この概念はシュバイツァーの「哲学」の核心をなす言葉である。しかし、この言葉を真に理解するためには、シュバイツァーの少年時代の動物への思いや、それに関する幾つかの体験談{(2) 参照}を読んだ方がはるかにより生き生きと理解できる。そこで、シュバイツァーの伝記を読んだり、シュバイツァー関連の映画を観たりすることを勧める。

しかしながら、難解ではあるが、一応、「生命への畏敬」を思いつくまでのシュバイツァーの思考の過程を簡単に紹介しておく。

(*15) 掲載写真は著作権の関係で省略。

原住民は野蛮であったと言われていた頃、逆に、原住民は白人に対して白人達を次のように批判したという。

“This same savage expressed the criticism that Europeans kill each other merely out of cruelty, because of course they don't want to eat the dead” (*4:p49)。

{【浜田訳文例】 この同じ原住民(未開人)は、ヨーロッパ人は死んだ人達を、もちろん、食べたいわけではないのに、単に残虐さから人を互いに殺し合う、と批判をしていた。}

これに対して、シュバイツァーは考え続け、次のような結論を導き出していく。

⇒①(我々は亜流者ではないのか) →つまり、人類は果たして進歩しつつあるのか。

⇒②そのためには人間について考えよう。→人間の原点は思考である。思考というこの能力が阻まれるところで、人間は人間の本性を失う。→それは何故か。

⇒③それは多忙なため娯楽のみが求められ、思考が捨てられているのであり、また、機械化などの専門化などにもより思考がなくなり、その結果人間性を喪失したのである。

⇒④これは文化の退歩である。人間性を取り戻す道は何か。→倫理性の回復である。

倫理性の回復とは何か、を考えていて1915年夏シュバイツァーは突然あることを思いつ

く。

→⑤「生命の畏敬」である。つまり、「『自分は生きようとする生命にかこまれた、生きようとする生命であることの自覚』、これが思考の対象の最後のものであって、同時に思考の出発点である。言いかえれば、生命の畏敬とは誰しもが生きたい生命を凡て貴ぶこと、生命のある凡ての生命を貴ぶことである」（*9 :p187）。

→⑥故に（すべての）「……生命に価値を与えるため、畏敬の念をもって生命に献身するという精神的行為でなくてはならない。それは、愛・献身・苦痛をともにし、喜びをともにするという精神的に裏付けられたもので」（*12: p165）なければならない。

（自他に対して）生きることへの畏敬の念を持ち、行動することが望ましい、とシュバイツァーは考えた。そして、シュバイツァーはそのように生涯を通じて行動した。この思考を理論的、哲学・倫理的に学ぼうとするのではなく、むしろ若き日のシュバイツァーの生活及び行動から理解した方が良いことを繰り返しておく。かつて、テキスト『My childhood and youth』を講読した理由の一つはこの点にあった。

◆^{なお}尚、今回使用したシュバイツァーの写真の大半は、真実と人間愛に生きた写真家・ユージン・スミス氏の撮った写真から掲載した。彼は、「(写真は) ……せいぜい小さな声にすぎないが……一枚の写真が……われわれの意識を呼び覚ますことができる」との信念を持ち、“MINAMATA”（『水俣』）などを撮り続けていた写真家である。このスミス氏についても、この教材（『求め続けて』）の7章に特集しているし、また、後期教材『旅に心を求めて』でも、本年も取り上げている。

（*17 : p48）掲載写真は著作権の関係で省略。下記（動画・7）がユージン・スミス等が撮影したシュバイツァー。（貴重な写真ですが、著作権関係でリンク切れになる可能性が大です。）

（3）【動画紹介】（リンク切れの際には御容赦を。）

（動画7・シュバイツァー関連映画紹介：5分版・音楽と映像のみ）

Due volte è iniziata la mia vita" a tribute to Albert Schweitzer

<https://www.youtube.com/watch?v=K7rlfqJD6og>

（シュバイツァーの生涯：80分版）

Dr. Albert Schweitzer - Full Documentary

<https://www.youtube.com/watch?v=Gf4B9v0s0CY>

【参考文献】

- (* 1) ALBERT SCHWEITZER, “MY LIFE AND THOUGHT”, GEORGE ALLEN & UNWIN
- (* 2) ALBERT SCHWEITZER (水口志計夫、大江三郎注釈),
“MY CHILDHOOD AND YOUTH”,南雲堂、1964年
- (* 3) ALBERT SCHWEITZER (川東ケン編), “AUS MEINER KINDHEIT UND JUGENDZEIT”,
(白水社)、1964年
- (* 4) ALBERT SCHWEITZER (斎藤光注釈), “OUT OF MY LIFE AND THOUGHT”,
(研究社)、1959年
- (* 5) ALBERT SCHWEITZER, “AUS MEINEM LEBEN UND DENKEN ”, Felix Meiner, 1980
- (* 6) ALBERT SCHWEITZER (岡地等注釈), “AFRICAN NOTEBOOK (アフリカ物語) ”
(成美堂)、1977年
- (* 7) 『シュバイツァー著作集・第一巻』、(白水社)、1973年
- (* 8) 森三重雄注釈、『ALBERT SCHWEITZER; LOUIS PASTEUR
(シュバイツァー、パスツール伝)』、(研究社)、1970年
- (* 9) 野村実、『人間シュバイツェル』、(岩波新書)、1975年
- (* 10) 小牧治・泉谷衆三郎、『人と思想・シュバイツァー』、(清水書院)、1977年
- (* 11) 伊藤好次郎監修、『FIVE GREAT MEN AND WOMEN (偉大な5人の伝記)』、
(数学研究社)
- (* 12) 御厨良一、『道標ー人生への思索』、(教育学習社)
- (* 13) 本多勝一、『殺される側の論理』、(朝日新聞社)、1982年
- (* 14) 『ユージン・スミス展』、(PPS通信社)、1982年
- (* 15) → 2018年から (*18の表紙に置き換え)
当初、最初のシュバイツァー写真はユージン・スミス撮影のものでした。下記文献参照。
しかし、著作権の関係で2018年は上記と置き換えました。
“W. Eugene Smith: HIS PHOTOGRAPHS AND NOTES”,
(AN APERTURE MONOGRAPH) , 1969年
- (* 16) Stewart and Polly Anne Graff (田中安行編注)、『Helen Keller』、(KIRIHARA SHOTEN)、
1979年
- (* 17) James Bentley, “ALBERT SCHWEITZER”, EXLEY, 1988

- (* 18) 江川泰一郎、『英文法解説』、(金子書房)、1964年
- (* 19) 小稲義男・山川喜久男・竹林滋・吉川道夫編、『新英和中辞典』、研究社、1967年